

**東秩父村中山間地域の
暮らし(食、慣習、自然風土)を通じた交流の創造**

活動結果報告書



大東文化大学国際関係学部

2017年度中山間ふるさと支援隊(代表 水野恭一)

中山間「ふるさと支援隊」活動状況報告書（一覧）

活動状況（2017年度）

活動日	内容	参加人数
7月15日	白石地区での交流会	20名
9月24日	手打ちうどん・冷汁づくり、稲刈り体験	8名
11月3日	萩平地区の八幡山神社の秋の祭礼	3名
12月17日	ゆずまき作り、みかん狩体験	9名
1月14日	ケズリバナ、小正月	12名

目次

- 1 第1回活動：3～9頁
 - 2 第2回活動：9～13頁
 - 3 第3回活動：14～19頁
 - 4 第4回活動：19～23頁
 - 5 第5回活動：23～26頁
 - 6 最終報告会：27～28頁
 - 7 総括：28～29頁
 - 8 広報関連（URL）：29頁
- 謝辞：29～30頁

1 東秩父村「ふるさと支援隊」が始動

7月15日、国際関係学部の教員と学生による、二つ目の「ふるさと支援隊」事業が、東秩父村の白石地区でスタートしました。

午前9時30分、大学からバスで東秩父村に向かいます。旅行産業論の水野恭一先生ご夫妻と、国際文化学科3年の横手海人さん、卒業生の堀越優実さん、ベトナムから留学中の大学院生のチャンさん、そして、鳩山町ふるさと支援隊からも根岸正樹氏と船橋春雄氏と新里先生が参加しました。車中では、自己紹介や東秩父村での活動にかけるそれぞれの思いを語り合いました。「道の駅 和紙の里 ひがしちちぶ」では、東秩父村で「地域おこし協力隊」として活躍する西沙耶香さんが出迎えてくださいました。西さんには、現地コーディネーターとして水野先生とともに本事業の企画運営に当たっていただくことになっています。

「和紙の里」で、和紙の原料に直に触れながら、職人の吉田伸也氏から和紙漉きの説明を聞いた後、野草に親しむ会や白石あじさい会の方々の待つ白石（しろいし）地区に向かいました。

7月15日（土）東秩父村・ふるさと支援隊

2017年7月15日（土）

◎ 9:25am

大東文化大学・東松山キャンパス 管理棟玄関前 集合 / 高坂駅解散
(図書館の南側)

※高坂駅解散は16:10頃を予定しています。

【コース】

東松山キャンパス発09:30予定～(バス約50分) 東秩父村和紙の里の見学(約30分)
～白石あじさいの道～(徒歩約5分) 白石キャンプ場へ、ご挨拶後昼食の準備、昼食
(カレーライスや郷土料理)、昼食、交流会や情報交換など～バスにて秩父高原牧場
(ふれあい牧場)施設散策(約30分)～バスにて(約50分)高坂駅へ、着後、解散

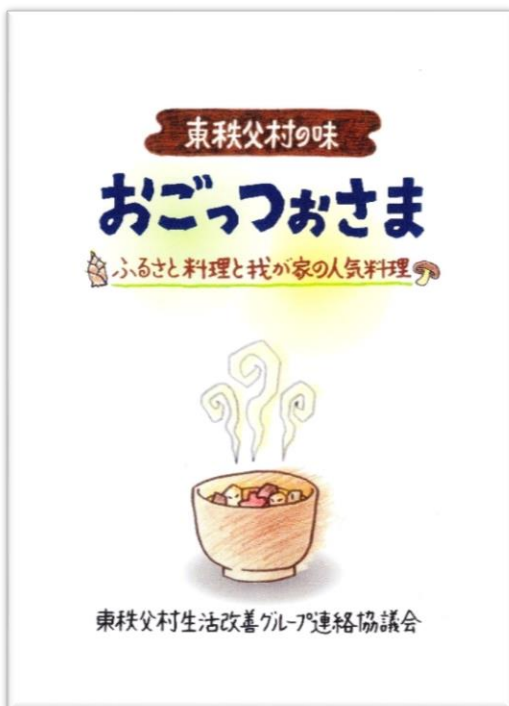




東秩父村は、埼玉県の唯一の村。埼玉県西部に位置し約 8 割を山林に囲まれた人口約 3000 人に満たない小さな山村集落です。この地域で盛んに行われている和紙漉きは約 1300 年の歴史があると言われており、2014 年には細川紙という和紙の製作技術がユネスコ無形文化遺産に登録されたことは記憶に新しいところです。

世界的な文化遺産の一方で、高齢化と過疎化が急速に進み、なかなか歯止めがかからない現状にあります。東秩父村には豊かな自然資源が豊富にあり、昔から人々は自然の恵みを生活に活かしながら共存して暮らしてきた歴史があります。人々が日常的に体感した地域の味や自然を活かす知恵は、記録として残されているものは少なく、高齢化と若年層の人口流出により語り継がれる機会も著しく少なくなっています。

世界的な文化遺産を育んだ東秩父村。その生活文化を継承するために、国際関係学部で「旅行産業論Ⅰ・Ⅱ」や「観光資源論」を講じる、水野恭一先生をリーダーに「ふるさと支援隊」が組織されたわけです。本支援隊は、本年 5 月に、2017 年度埼玉県中山間ふるさと支援隊事業に選定されています。



「東秩父村中山間地域の暮らし（食、慣習、自然風土）を通じた交流の創造」をテーマに、最終的な成果としては、15 年前に発行された郷土料理本『おごっつおさま—ふるさと料理と我が家の人気料理—』を、未来に継承されるように、地元の方々と学生の共同作業で見直し復刻版を製作することを目指します。東秩父村の生活、暮らし、慣習などを学ぶために地元の方々と交流し、野草を使った料理づくりや山菜採りなどを体験することになります。

白石地区での交流会(7月15日)

「和紙の里」の後は、白石地区の方々との交流会です。白石地区は「あじさいの道」で有名です。1.8kmにわたって2000株のあじさいが広がる「里山のオアシス」。満開の時期は過ぎていましたが、それでも山道の両側の白や薄青色のアジサイを十分に満喫することができました。



白石地区に入り、野草に親しむ会の渡邊さんのお宅を訪問しました。養蜂のようすを見せていただき、自然と人間が共生するために、里山で鹿や猪を駆除することが必要であることなど、山の生活に密着した貴重なお話を伺うことができました。



家庭内の養蜂場



渡邊さんの話を聞く学生たち



けっこう重いですよ。

渡邊さん宅を後に、支援隊は、交流会の会場となっている白石キャンプ場に向かいます。キャンプ場の炊事場では、野草に親しむ会の方々が、カレーライスづくりの準備をしていていました。自己紹介の後、早速、ご飯炊きとカレーづくりに取り掛かりました。本日のカレーには鹿や猪の肉が入ります。おやつ代わりに、茹でた小さめのジャガイモを頬張りながら、昼食作りは首尾よく進みました。

釜で炊いた炊き立てのご飯は最高ですね。カレーライスにらっきょう、そして、茄子やきゅうりの漬物をトッピングし、胡麻の冷や汁（ひやしる）をかけたご飯など、それぞれが思い思いの流儀で里山の恵を味わっていました。時折、鹿や猪の柔らかい焼肉もふるまわれ、学生たちは大喜びでした。



分かち合い

満腹になったところで、あらためて、今後の支援隊活動にかける思いを分かち合いました。「日本に来て野外でご飯を作った体験ははじめてで、東秩父村が好きになりました」「里山の暮らしにとっても興味をもっています。東秩父村の活動には最後までかかわりたいと思います」「自分の生まれ故郷もこんな感じの地域です。一日東秩父村にいて、ふるさとを思いだしました」。

最後に、現地コーディネーターとしてご指導いただく西沙耶香さんから。「高校生の頃は、村の出身であることが恥ずかしくて、村から出るばかり考えていました（野草に親しむ会の方から「みんなそうだよ」と一言）。大学で都内に出て、社会人として働くようになり、

だんだんと村にしかないものの大切さに気づけるようになりました。これから何度も東秩父村を訪れ、地元の人々との交流を深め、東秩父村のすばらしい自然や暮らしの魅力を吸収してください」。



第一回を終えて

若いころから山を歩くことが好きで、この奥武蔵の山並みに囲まれた東秩父村には、なんども足を運びました。しかし、この山郷の暮らしや風土などには目もくれず、ただ尾根道や頂を歩いただけでした。ただ、集落を通過するたび、都心からわずか2時間ほどの移動なのに私たちの生活とはまるで異なるこの地域の「暮らし」がとても気になっていました。

それから数十年後、様々な方々とのご縁に導かれるように、この「東秩父村ふるさと支援隊」の企画が始まりました。埼玉県東松山農林振興センター副所長の黒澤氏、東秩父村地域おこし協力隊の西さん、東秩父村野草に親しむ会の方々、埼玉県農林部農業ビジネス支援課の三谷氏、そして様々にご指導いただいた新里孝一先生などの皆さまに出会うことがなければ、このような機会には恵まれなかったと思います。

本日の交流会のために、東秩父村白石地区の皆様をはじめ多くの方々にご支援をいただきました。野草に親しむ会の渡邊泰子さん、鈴木久恵さん、磯田瑞子さん。昼食づくりのご指導のほか、美味しい漬物をご馳走になりました。白石あじさい会の坂本今年さん、渡邊桂亮さん、渡邊均さん、渡辺克典さん、橋本和明さんには、里山の生活についてご教示いただきました。和紙の里の吉田伸也さんには和紙漉きについて丁寧に説明していただきました。

埼玉県農林部農業ビジネス支援課で「ふるさと支援隊事業」を担当されている三谷航平氏と埼玉県東松山農林振興センターの小池崇氏と畠山悠梨氏にもご参加いただくことができました。

鳩山町の根岸氏とときがわ町の船橋氏にも、積極的に東秩父村の方々との交流を深めていただきました。三谷氏からは「他地区の支援隊同士の連携という面で参考になりました」とのコメントを頂戴しております。

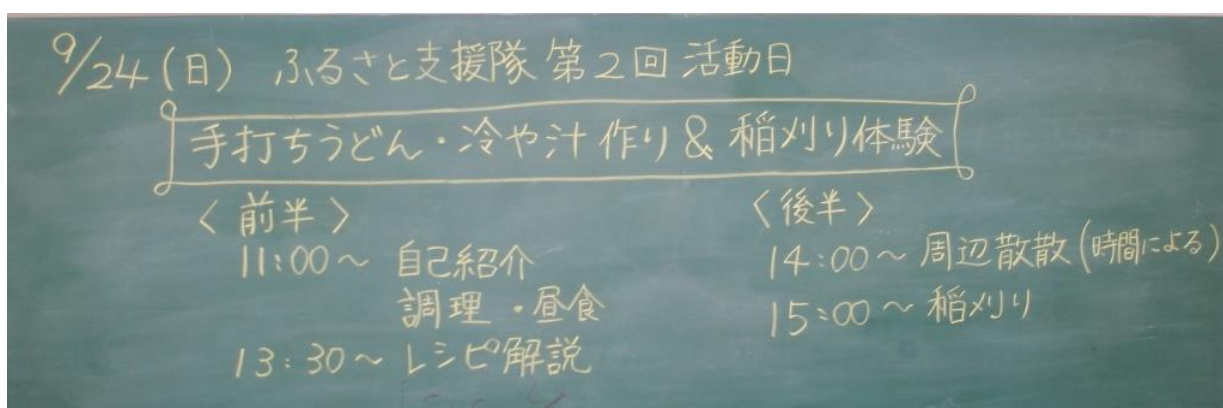
西沙耶香さんには、本事業の準備段階からさまざまなご提案をいただき、水野先生とともに、村役場や白石地区の皆様との連絡調整に当たっていただきました。記して感謝申し上げます。



東秩父村のふるさと支援隊が、2回目の活動。

9月24日、東秩父村において、ふるさと支援隊の二回目の活動が行われました。ふるさと支援隊は「東秩父村中山間地域の暮らし（食、慣習、自然風土）を通じた交流の創造」をテーマに掲げ、15年前に発行された郷土料理本『おごっつおさまーふるさと料理と我が家の人気料理一』を、地元の方々と学生の共同作業で見直し復刻版を製作することを目指します。今回は、事実上その第1回目になります。

11時に、バスで「東秩父村コミュニティーセンターやまなみ」に到着すると「野草に親しむ会」の渡邊泰子さんと西沙耶香さん（地域おこし協力隊）が出迎えてくださいました。



東秩父村コミュニティーセンターやまなみ



地域おこし協力隊の西沙耶香さん

調理実習 1ー冷やし汁

今回の課題は「手打ちうどん・冷やし汁」の調理実習と稲刈り体験。『おごっつおさま』に掲載された超人気料理を「体験」します。「野草に親しむ会」の磯田瑞子さん、鈴木久恵さん、渡邊泰子さんに講師をお務めいただきました。

7月15日の白石キャンプ場でも「冷やし汁」づくりの一部を体験しましたが、今回は「胡麻を炒る」一からの作業です。地元で「金胡麻」と称される胡麻をフライパンで炒ります。

炒った胡麻をすり鉢に移し、すりこぎ棒で丁寧にすります。その後、だし汁と磯田瑞子さん自家製の味噌と混ぜ合わせ、薄切りにしたキュウリやミョウガ、青じそを入れてできあがり。



いわれ (由来)
暑い時にうれしい冷たい汁もの。昔、母がよく井戸につり下げて色々なものを冷やしていたのを思い出す。その冷たい井戸水を使った冷やし汁だったが、今は冷蔵庫のおかげでそんな苦労は思いもよらない。

材料 (4人分)

ごま	大さじ4
みそ	大さじ3
だし汁	3カップ
キュウリ	1本
青じそ	8枚
ミョウガ	4個

作り方

- ①ごまはいつでもすり鉢でする。みそを加えて更にすり混ぜ、冷たいだし汁を少しずつ加えてすりのばす。
- ②キュウリとミョウガはうすい小口切り、青じそは千切りにしておく。
- ③キュウリとミョウガを汁に混ぜ、器に盛って青じそを千切りを飾る。



調理実習 2-手打ちうどん

次は「手打ちうどん」。うどん粉はもちろん地粉です。つなぎの塩と水を混ぜ、かたまりができたなら、手のひらの厚い部分（母指級）でひたすら捏ねます。さらに、足で踏んだ生地を棒に巻いて薄くのします。「トン、トン」と打つように伸ばすのがコツ。「うどんを打つ」という表現はこのあたりから来ているのではないかと磯田瑞子さんが教えてくれました。

慎重な横手君の棒捌きに「もっと力を入れて」と渡邊さんの檄が飛びます。水野先生も西さんも大奮闘でしたね。

のしたうどんを細く切り、茹で上げ、水囊（すいのう）ですくって水を切れればできあがり。水囊にも隣の小川町の竹沢あたりの材料が使用されているようです。昆布だしの汁と、冷や汁につけて、茹でたてのうどんを美味しくいただきました。

手打ちうどん

いわれ（由来）

自給自足の時代、田んぼの少ない山間地では麦の栽培を多くしたため、粉食文化が発達してきた。なかでもうどんは夕食として、又もてなし料理としてもよく作られた。

材料（4人分）

	地粉（小麦粉） 500g	薬味	季節のもの適宜
麺	塩 小さじ 1		
	水 220～230cc		
	打ち粉（小麦粉） 100g		
汁	だし汁 3カップ		
	しょうゆ 80～90cc		
	酒 50cc		

作り方

- ①地粉に塩を入れてよく混ぜ合わせる。
- ②①を水でこね、厚めのポリ袋に入れて踏む。これを4～5回繰り返す。
- ③めん棒での上して、好みの太さに切る。
- ④鍋にたっぷりの湯をわかし、ゆでて水にさらし、ざるにあげる。
- ⑤だし汁と酒、しょうゆを煮立ててつけ汁をつくり、薬味を添える。



出し汁をとった鯉節とミョウガで鈴木久恵さんが作ってくれた郷土料理と、渡邊さん自家製のブルーベリージャムを挟んだサンドイッチやヨーグルトも振る舞われ、とても贅沢なランチタイムとなりました。

調理中や食事中、礒田、鈴木、渡邊のお三方から、東秩父村の昔や郷土料理にまつわる興味深いお話をたくさん伺うことができました。これらを記録に残し『おごっつおさま』復刻版に活かしていきたいと思います。



稲刈り体験

調理実習の片付けを終えた後、センター近くの関根高義さんの田んぼで、稲刈りを体験させていただきました。たわわに実った稲穂を一気に刈り取りました。鈴木久恵さんと渡邊泰子さんには、調理実習に引き続き、稲刈り体験にもご協力いただきました。



稲を刈りとり、10株くらいをまとめて紐で束ねます。このとき、稲木にかけて天日干しをする際にバラバラにならないようにしっかり束ねなければなりません。稲を束ねる作業に、稲刈り以上に苦戦しているように見えました。稲束を稲木に掛け作業を終了しました。

秋晴れに恵まれ、とてもよい汗をかくことができました。刈田の風景はいつ見ても美しいものです。2週間ほどの天日干しの後、脱穀、粳摺りを経て、新米となります。実りの秋はこれからが本番です。

今回の活動では学生の参加が少なかったこともあり、フィールドワークの体制としては不十分な面もありました。しかし、前回に引き続き、野草に親しむ会の磯田瑞子さん、鈴木久恵さん、渡邊泰子さんのご協力に助けられ、なんとか『おごっつおさま』復刻版に向けて一歩をふみだすことができました。記して感謝申し上げます。



ふるさと支援隊(東秩父村)が、東秩父村三地域の「お祭」を体験しました。

学生の参加者は、国際文化学科3年の横手海人さん、ベトナムから留学中の大学院生のチャンさん、中国からの留学生で国際関係学科1年の林宇さんの3名。水野先生ご夫妻とお孫さんの徳永健太郎君が同行してくれました。小川町駅で待合せをし、路線バスに乗り和紙の里で西さんと合流。東秩父村役場の車で傘鉾が安置されている常光寺で地域の方々と合流しました。

東秩父村坂本 八幡大神社 例大祭

はちまんさま
ずっとずっと昔からこの里を
見守ってくれています
11月3日はお祭りです
神楽が舞われ
境内には笛や太鼓の音が響きます
ひよっところがお餅をまきますので
たくさんお餅をもらいに来てください
福引きも用意しました!

11月3日 文化の日
11時 祭典執行
10時~16時 神楽奉奏

坂本 八幡大神社
埼玉県秩父郡東秩父村坂本1541
<http://mansmizuki03.wixsite.com/hachimansama>

坂本 八幡大神社

QRコード

Facebook

Instagram

開

坂本 八幡大神社

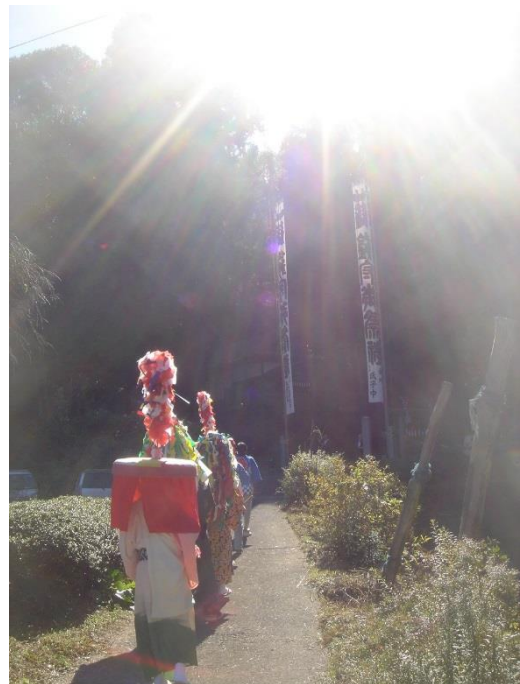
坂本 八幡大神社

坂本 八幡大神社

3回目となる今回は、西沙耶香さん（地域おこし協力隊）の薦めにより、萩平地区の八幡山神社の秋の祭礼に参加してきました。この地域では2014年まで、立派な傘鉾を下の常光寺から上の神社まで約1キロ引いていくことが恒例だったのですが、若者の参加が少なくなり中止せざるをえなくなりました。

そこで大東文化大学のふるさと支援隊の参加、協力で再開できないかとの要請がありましたが、諸般の事情により傘鉾は引かずに、祭礼だけに参加することになりました。その代わりに坂本（八幡大神社）と朝日根（八幡神社）地域で開催される祭礼も見学することができました。





傘鉾を乗せる山車を見学した後、横手さんと林さんが高さ 5 メートルほどもある万灯を持ちながら先導します。後ろに山車の代わりの軽トラックの荷台に太鼓を乗せ、打ち手 3 人が大太鼓 1 つ、小太鼓 2 つを激しく打ちながら、ゆっくりと八幡山神社に進んでいきます。小太鼓を打つのは二人の中学生で、そのうちの一人は萩平に住み、中学校の友達を誘って太鼓や獅子舞の稽古をしているとのこと。「子供たちが少なくなっているのが悩みです。」と地域の方が話してくれました。

1 キロほどのゆるやかな登り道を太鼓の音に導かれながら進みます。途中三回ほど休憩が入ります。林道の無かった昔は、沢沿いの山道を直線的に重い山車を引いたそうです。休憩中はお茶やお菓子や漬物、煮物などの接待を受けながら、40 分ほどかけて八幡山神社に到着しました。一休みの後、獅子舞と本殿の中で行われた女性の神主さんによる神事も拝見しました。神事には東秩父村村長も参加されました。


〈 東秩父村 11月の伝統行事 詳観 〉

●坂本：坂本八幡大神社 神代里神楽
日時：11月3日(祝)
午前10時～午後4時
祭典 午前11時～
会場：坂本 坂本八幡大神社
内容：祭典、神楽の奉納




神代里神楽 村指定無形民俗文化財
安政年間(1854～1860年)より伝えられる里神楽で、坂本八幡大神社の秋の大祭に神楽殿で奉納されます。
この神楽は昔、衣装・用具を保管していた倉庫が火災になり、一時中断しましたが深谷市上の首より飯沼利平氏を招いて、その技をみがき再現したといわれます。
神楽は、舞方8名・はやし方3名で行われ、舞は前縁による清めを含め18座からなっています。

●皆谷：朝日根の獅子舞
日時：11月3日(祝)
午前8時～午後4時
祭典 午前9時～
会場：皆谷 朝日根八幡神社
内容：祭典、獅子舞の奉納



朝日根の獅子舞 村指定無形民俗文化財 (皆谷)
文政3年(1820)頃、当地区に悪疫が流行して多数の人々が困窮した時、藤造という人が、地区の氏神八幡神社に病魔平癒を祈願し、獅子舞を奉納することを約したことに始まると伝えられています。
獅子舞の流儀は、「雄形流ささら」といわれ、「朝日根のあべれ獅子」と称される権貴い舞い方をします。獅子は大獅子・中獅子・小獅子3頭で、ささら2名、笛方を加えて構成され、舞は12座です。毎年11月上旬に奉納されます。

●御堂：萩平の獅子舞
日時：11月3日(祝)
午前11時～午後2時
祭典 12時30分
会場：萩平 八幡山神社
内容：祭典、獅子舞の奉納
※H29は笠鉾実施無し
H26実施、H27、28実施無し



萩平の獅子舞 村指定無形民俗文化財 (御堂)
萩平にある八幡山神社で11月に奉納される「雄形ささら」です。
この獅子舞は延享3年(1746)奉祭と伝わる萩平の山神社に奉納されていたものですが、昭和3年11月に八幡神社に合祀され、その後八幡山神社奉納となりました。
獅子は大獅子・中獅子・小獅子からなり、服装はタツツケをはき、前掛をかけ、草履です。舞は12座で構成されており、指導者5名・笛方5名・獅子方8名の方々によって積極的に伝承されています。

●大内沢：浅間神社の獅子舞
日時：11月の第一日曜日
午前10時～午後3時
祭典 午前9時～
会場：大内沢 大内沢浅間神社
内容：祭典、獅子舞の奉納



浅間神社の獅子舞 村指定無形民俗文化財 (大内沢)
後土御門天皇の頃(1464～1500年)、当地区に悪疫が流行し、村人が困窮した時、龍笛を用いて氏神浅間神社に奉納、悪病退散、病魔平癒を祈念したのが始まりといわれています。
獅子舞の流儀は「ツシマ流」と伝えられており、獅子は牡獅子2頭、牝獅子1頭からなり、通称先獅子・中獅子・後獅子と呼ばれています。いずれもタツツケ袴を付け、フナジ原さの山ザサラで、舞は7座(しぼ)です。毎年11月上旬に浅間神社の大祭に奉納されます。

平成29年11月25日 農業建設課作成

萩平地域の方々からは豚汁やうどん、漬物などのお振る舞いを受けた後、坂本の八幡大神社に向かい、格式のある「里神楽」を見学しました。到着した時はちょうど天の岩戸神話の「岩戸座」の舞が行われており、みんな興味深く観賞していました。子供たちへの餅まきが始まったころに移動し、皆谷・朝日根に向いました。

皆谷・朝日根でも豚汁などのお振る舞い受け、“朝日根のあばれ獅子”と称される動きの激しい舞を見学しました。役員の方のお話しによると、新しく見つかった資料の中には、永和2年（1376年）に嵐山町の鎌形八幡神社から伝わったと云われる獅子舞だと書かれているとのことで、600年以上前に伝わった古い伝統のある「獅子舞」だと話してくれました（獅子舞の鳴り物の中で話しをされていたので、もしかしたら私の聞き違いかもしれませんが「600年以上遡れる」とたしかにお聞きしました）。

ちなみに鎌形八幡の境内には木曾義仲の産湯の清水だと伝わる井戸があります。この神社も含めて、今回お祭を見学した神社はすべて八幡社で、源氏の氏神が祭られていることに不思議な想いがしています。



午後の 4 時過ぎに和紙の里に戻り、バスにて小川町駅に向かいそこで次回の打合せを済ませ、解散しました。

今回の活動で三箇所もの祭礼に参加し見学できたことは、東秩父村の風土や文化を知るうえで多いに役立ったと思います。全部の箇所を同行し解説してくれた西沙耶香さんや祭礼に携わる役員の方々には、ずいぶんとお世話になり感謝の念にたえません。急に決まった活動ですが、お祭を手伝いながら見学できるということで学生 3 名と私ども含めて 6 名が参加でき、非常に珍しい体験をさせてもらいました。この経験が次回からの活動にも大きく影響することと思います。

第 4 回活動一ゆずまき(12 月 17 日)

2017 年 12 月 17 日(日)に、東秩父村のふるさと支援隊が、大内沢のみかん園(見晴園)でふくれ(福来)みかんの見学と、みかん狩りを行い、午後にはお正月の郷土保存食「ゆず巻き」作りの体験をしてきました。

今回の学生の参加者は 4 名で、国際文化学科 3 年の横手海人君、国際関係学科 1 年の林宇君、ベトナムから留学中の大学院生のチャンさん、マレーシアからの留学生フィファさんが参加してくれました。

東武東上線小川町駅に 9 時半に集合し路線バスに乗り、和紙の里で東秩父村地域おこし協力隊の西さんと、合流し、東秩父村役場の車で大内沢の駐車場に向いました。そこから登り道を 15 分ほど歩いてみかん園・見晴園に到着。好天にも恵まれ、登るにしたがいどんどん景色が良くなります。まずは、ふくれ(福来)みかんの木を見学し、1 時間ほどみかん狩りを体験しました。みかん園には沢山のみかんの木がありましたが、甘くおいしいみかんをとるコツは鳥が食べた木を見つけることだそうです。ふくれみかんは、他のみかんの実よりはかなり小ぶりで、中身は食べずにその皮を干し、七味唐辛子の材料にするそうです。ちなみに中身をみんなで試しに食べてみましたが、かなりすっぱい味でしたが、食べられないことはないようです。







12月18日朝のNHK「首都圏ニュース」で、ゆずまきづくりの活動が紹介されました。



第5回活動（2018年1月14日）

2018年1月14日（日）、東秩父村において、ふるさと支援隊の五回目の活動が行われました。今回はまず、皆谷・朝日根の磯田さん宅で小正月（1月15日）のモノヅクリ「ケズリバナ」製作の見学と、その習俗と技術的な解説を講師の磯田さんや関根さんからお聞きし、小正月の行事、繭玉団子作りなどを地域の主婦の方々から教えていただきました。午後には御堂のコミュニティーセンター「やまなみ」の大ホールでお二人の講師から「ケズリバナ」の作り方を指導していただき、実際に製作もしてきました。

今回の学生の参加者は3名で、国際文化学科3年の横手海人君、国際関係学科4年の峯絵理佳さん、ベトナムから留学中の大学院生のチャンさん、そして2017年卒業生の堀越優美さんも参加してくれました。（水野孝子も同行）

1月14日（日）東武東上線小川町駅9時に集合し、路線バスに乗り皆谷まで向かいました。バス停で東秩父村地域おこし協力隊の西さんと「ケズリバナ」の講師、関根高義さんと合流し、磯田さん宅に向いました。到着すると、磯田さんはちょうどこの「ケズリバナ」製作だけに使用する「ハナカキナタ（鉦）」で「十六はな」を製作中でした。この「削りかけ（ケズリバナ）」という習俗は、日本全国に広がっているそうですが、埼玉県から群馬県にかけては種類も伝承も、非常に豊かな所だそうです。

初めて見る「ケズリバナ」です、学生たちはあちこちに飾られている「はな」を見つけては興奮し、とても驚いている様子でした。磯田さんは、他に「十二ばな」や屋内の歳神さま

や神棚に飾る長め（約 80cm）の「はな」も製作しており、「十六はな」と「十二ばな」はニワトコの木を節を利用して作り、長めの神棚などに飾るハナは、ミズキの木を使うそうです。十六の数字は蚕の足の数からきており、十二は一年の月の数と云われている、と解説してくれました。床の間には一年中「ハナ」を飾っておくそうです。磯田さんや関根さんの話では「ケズリバナ」という言い方は新しく、以前は「ハナヲカク（カキハナ）」と言われていたそうです。その他小正月のツクリモノとしての粥かき棒、ハラミバシ、アワボ（粟穂）、ヒエボ（稗穂）なども見せていただきました。



お話しの後、実際に磯田さんが「ハナ」を削っているところを見学しました。まるで手品のようにケズリバナが出来上がってくる様子は、名人ならではの技です。その後、磯田瑞子さんから「繭玉団子作りをしましょう。」と誘われ、上新粉（米粉）をこねたお団子から繭玉や「お祝い事なので、色々な形のものを作ったら、」とのアドバイスを受け、みんなで鳥や亀、鹿の子、へびなどを思い思いにこしらえていました。学生たちは、それぞれに作ったものを蒸してからお土産にと頂戴しました。繭玉に作られたものは梅の小枝に刺し神棚などに飾り、作物や蚕の豊作を祈念した与祝行事だと云われています。ケズリバナもまた、養蚕に関係した行事だといわれています。





お昼時には小正月のお祝いの小豆粥をご馳走になりました。大きな鍋で煮られたお粥が登場しその粥を、棒の先に繭玉を挟んだ二本の粥かき棒でかき回してから頂くのです。この小豆粥を女性が食べる時、熱いのでふうふうと吹くと、「お嫁に行くときに、雪や雨が降る」といわれているそうです。



煮物や漬物のご馳走もいただいた後、「ケズリバナ」製作の会場コミュニティーセンター「やまなみ」に移動しました。講師の倉林均さんと関根高義さんから「ケズリバナ」製作の解説と諸注意をうけ、早速学生たちも作り始めました。最初は「ハナカキナタ」が上手く使えず、なかなか削ることができなかったのですが、講師の方々に直接指導してもらいながら、二時間ほどもくもくと製作に没頭していました。やはり上手、下手があるようで出来上がりの差はしかたありません。上手く出来なかった学生は講師の方々が作った「ハナ」を頂いて持帰りました。

ケズリバナ製作を終了し、片付けの後のフィードバックの時間に参加した学生や講師の方々から感想を話してもらいました。学生たちは「またきちんと習ってみたい」、「家でも、友人たちに教えてケズってみたい」、「ケズリバナや繭玉作りを体験し東秩父村の奥深さを感じました。」などなどとても価値のある経験になったようです。講師のお二方からは「この東秩父村の正月の注連縄作り、小正月のケズリバナ作りや繭玉作りなどの伝承されてきた技術を、必ず残したい！」とお話いただきました。

帰りのバスの中に乗り込むと、乗っていた登山客から、私たちが抱えているケズリバナを見て質問攻めにされました。珍しいのでしょうか、学生たちはこの日に聞きかじったことを懸命に説明していました。また、途中からバスに乗ってきた村の女性からは「懐かしい、子供のころ作ったんですよ！」と話しかけてくれました。なんと充実した日になったことかと、学生たちの顔が心なしかほころんでいるように見えました。

今回のふるさと支援隊では、東秩父村の伝統行事の製作も含めた現場に立ち会うことができ、とても充実した活動ができたと思います。『おごっつおさま』の復刻版のコンテンツにもなる「小豆粥」や「繭玉餅」作りも体験できたことは、学生たちにとってとても有意義な時間でした。

今回の充実した活動を支えてくれた、磯田博安さん、関根高義さん、倉林均さん、磯田瑞子さん、鈴木久恵さん、渡邊泰子さん、特別参加の秩父の上林さん、東村山の関田さん、そして毎回コーディネーターとして動いてくれている、地域おこし協力隊の西沙耶香には、多大なる感謝を申し上げるとともに、これからの活動へのさらなるご協力を願って、報告を終えることにします。

14日の活動が、『埼玉新聞』（1月18日）で紹介されました。

小正月を留学生に

東秩父

東秩父村ふるさと支援隊が14日、小正月(15日)の行事を見学し、ケズリバナを体験した。同村では昨年からの県の中山間地域ふるさと調査研究事業を導入。大東文化大学国際関係学部の学生約10人が支援隊として、地域の暮らし(食・慣習・自然風土)を通じた交流活動に取り組んでいる。

この日は4人の学生が参加。午前中は皆谷の磯田博安さん(88)宅を訪れ、小正月の行事で年神様の棚などに飾る手作りのハナや繭玉のほか、かゆかき棒、刀、めすら箸などを

どを見学し、米の粉をお湯でこねて丸め、蒸して作る繭玉作りを体験した。

午後は御堂のコミュニティセンター「やまなみ」で、関根高義さん(80)、倉林均さん(87)の指導でハナ作りを体験。「十六バナ」作りに取り組んだ。

ベトナム出身の留学生、グエン・ティ・タイ・チャンさん(27)は「ケズリバナはベトナムにはない文化で、作るの

ふるさと支援隊 伝統行事で交流

は難しかったが、とても楽しかった」という。

峯絵理佳さん(23)は「昔から受け継がれてきている風習を体験できて良かった。山に

ニワトコの本を探しに行った。自分でまた作ってみた。今後、支援隊は郷土料理本『おごっつおさま』の復刻版発行や、観光資源の掘り起こしとツアー化などに取り組むことが多いがこんな身近で、こんな風習があったことを知り驚いたと話していた。

(磯田正重)



ケズリバナを学ぶふるさと支援隊の学生(左側の4人)たち
=東秩父村御堂のコミュニティセンター「やまなみ」

6 最終報告会

報告会のトップバッターは、旅行産業論の水野恭一先生をリーダーとする東秩父村の支援隊です。活動テーマは「東秩父村中山間地域の暮らし（食、慣習、自然風土）を通じた交流の創造」。水野先生、峯絵理佳さん、林宇さん、東秩父村の地域おこし協力隊の西沙耶香さんが登壇しました。

水野先生による活動の狙いや 7 月以後の活動の具体的な説明の後、峯さんと林さんから活動を通じて得た気づきなどが発表されました。峯さんは「国際関係学部ではアジア地域の文化や歴史を学んでいるけれど、東秩父村での活動に参加してみて、日本にある豊かな文化をあまりにも知らなすぎたことを痛感しました」と語り、林さんは「さまざまな保存食に感激した」と述べました。

発表後、「活動 1 年目とは思えないほどに東秩父村の人々との親密な交流が感じられるが、どのようにして関係を構築されたのか？」という質問がありました。「地域おこし協力隊の西沙耶香さんのご尽力のお陰で、地元の人々との交流のために苦勞することは一つもありませんでした」と水野先生。



7 今年度の総括と次年度の課題

①参加者の感想

i) 学生のレポートより

伝統技術、動物、生活文化、自然など、この地域ならではの豊富な生活資源が残っており、和紙の里やあじさいの道、キャンプ場、牧場といった観光資源の多様性にも驚かされた。僕が暮らす高坂からほど遠くない距離にあるにも関わらず、これまでこの地域の存在を知らなかったのが、ふるさと支援隊の活動により、より多くの人に東秩父村の存在と魅力を知ってもらいたい。支援隊には外国人留学生も参加しており、日本の田舎の暮らしの良さを知ってもらえる貴重な体験だと思う。また、例えば『新・おごっつおさま』製作などの面で、日本人にはできない視点が生まれると思うし、全く新しい形での観光開発、支援が出来ると感じた。

磯田さんや鈴木さんは「昔は石鹸の代わりによくうどんのゆで汁で髪を洗っていたねえ」

と話されていた。めんつゆを作る際に使ったダシ(昆布と鰹節)も、そのまま捨てるのではなく即席の佃煮にして食べたし、「食べ物は無駄を出さずに最後まで使う」という先人の知恵を学んだ。

僕が会った東秩父村の多くの人は自分の畑や農園を持ち、ジャムや味噌、漬物など自家製の食べ物を作っている人が多く、自給自足の生活文化の度合いが町の生活者に比べて深く浸透していることに驚きを感じた。そして現地で採れた野菜を使って作る郷土料理はなによりも新鮮で、心がこもっていて本当に美味しかった。

ii) 地元の方々の声



いつもオープンでウェルカムな気持ちでいます。年代も育った国も違うから、最初は何を話そうか緊張もありました。一緒にやってみたり、体験してもらうことで自分たちも学ばせてもらっています。もっと知りたいという気持ちが湧いてきて、刺激になっています。今後はもっとコミュニケーションの時間をとりたい。留学生たちから外国の料理を教わって、地の食材を使った新たな料理に挑戦してみたいです。(渡辺泰子さん)

料理など好きなことで関わっているから毎回楽しいです。「うまい！」と大きな声で言ってくれて、喜んでいる様子を見ると嬉しくなります。昔は、家の仕事のお手伝いなど嫌だなあと思ってもやるのが当たり前の暮らしでした。だからこそ、何があっても平気だと思えるし、何とかなるといふ気持ちで過ごせていると思います。なんでもやってみるものだと思っただけ挑戦してきたので、やれるうちは皆さんと楽しんで挑戦したいです。(鈴木久恵さん)



おごっつおさま発行の時には各自メニューを書き起こした資料をまとめたりして、編集作業を行いました。当時は歴史的仮名遣いの方もいたので今の言葉に起こし直したのを覚えています。だんだんと身体が動かなくなってきたりもありますが、1回1回とても楽しんでいきます。ちょうど孫の世代でこういうことに興味のない人も多いけど、直接話ができたり、知ってもらえるのは嬉しいですね。(磯田 瑞子さん)

②課題

- i) 学業やアルバイトで忙しい学生が多いため、受入れ地域も含めた日程調整が必要である。
- ii) 学生の参加を促すためのさまざまな施策を検討する必要がある。
- iii) 2017年度は留学生たち(3名)の参加があり、まだ増える可能性もあるので、彼らを活かした活動を考えたい。

iv) 3月中旬から4月にかけての春の恵みの盛んな時期に活動をしたい。

③来年度に向けて

『おごっつおさま』発行に向けた取材、編集作業と留学生を対象とした交流ツアー（日本の暮らし体験など）の検討が来年度の活動の日本柱になる。

地域の方との交流と学生同士の交流が目的会を重ねるごとに、関心のある方の積極的な参加がみられ、多様な層の交流の場になっている。視点が多様だからこそ生まれる気付き、発見を活かしてみんなで東秩父村を面白がっていきたい。

8 広報関連

◆ホームページ等

[国際関係学部HP](#)

http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_23073.html (7月15日)

http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_23558.html (9月24日)

http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_23853.html (11月3日)

http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_23969.html (12月17日)

http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_24146.html
(2月9日)

謝辞

2017年度の活動を通じて、多くの方々に「応援団」としてご尽力いただきました。以下にご尊名を記して深く感謝の意を表します。ありがとうございました。

東秩父村の地域おこし協力隊の西沙耶香さん。野草に親しむ会の渡邊泰子さん、鈴木久恵さん、磯田瑞子さん。白石あじさい会の坂本年さん、渡邊桂亮さん、渡邊均さん、渡辺克典さん、橋本和明さん。和紙の里職員の吉田伸也さん。稲刈りをご指導いただいた関根高義さん。御堂・萩平地区の皆さま、皆谷・朝日根地区の皆さま、坂本地区の皆さま。ケズリバナをご指導いただいた磯田博安さん、倉林均さん、竹細工職人の関田徹也さん、大

工の上林歳明さん。

埼玉県農林部農業ビジネス支援課の三谷航平氏と埼玉県東松山農林振興センターの小池崇氏と畠山悠梨氏。

花之木営農組合の船橋春雄氏、根岸正樹氏。大東文化大学地域連携センターの中野泰彦事務長、東松山分室の堀越健太氏と加藤たづる氏。